

荒木 薫先生（佐賀大学ダイバーシティ推進室 副室長）

母であり、医者（小児科）であり、研究者であり、教育者であり、コーディネーターである荒木先生。

男性ならば、朝出勤する際に「今日、飲み会だから！」の一言でコトが済むのに、女性は「子供が熱を出したので、早く帰ってもいいですか？」「当直を免除してもらってもいいですか？」「今日は仕事が遅くなってもいいですか？」「今日は歓送迎会に行ってもいいですか？」「当直してもいいですか？」と、職場や家族にお伺いを立てないといけない—そんな心が重たくなるスケジュール調整をしながらも、それを心のどこかで楽しみながら、仕事を継続して来られました。

これからは、ワークライフ・シナジー（プライベートの充実が、仕事への好循環を生み出す）の時代と、お話を結ばれました。

子供可愛いのも今だけだけど、仕事を頑張れる働き盛りも、30代から40代の今だけだから！

大野 聡子 先生（久留米大学医学部内科学講座心臓・血管内科部門、久留米大学病院循環器病センター外来医長）

出産後から、国内学会に限らず、毎年のように国際学会に参加されている大野聡子先生。研究者として、大動脈解離と炎症細胞の関係を明らかにされた業績をお持ちです。

学位を取得された現在は、大学病院の循環器病センターで、診察医としてだけでなく管理職としてのキャリアも積んでおられます。

大野先生は、「心の中のもやもや」は、なぜ生まれてくるのか？ もやもやの原因は何か？ を深く考えることで、自分がどうありたいか、自分の価値観は何か、がわかり、自己実現という幸せへつながる！と、話されました。

他者からの評価で動くのではなく、自身の価値観で行動することが、グローバルに生きる時代に求められますね。

伊藤 雅世 先生（福西会病院 大腸肛門病センター非常勤医師）

伊藤先生は外科医です。

外科を選ぶ気持ちは全くなかったそうですが、臨床実習や研修医の時に外科を回った時に、手術室の活気ある雰囲気や女性医師にしかできない分野のある診療科ということで、外科を選ばれました。

20代で結婚。現在双子を含む4児の母ながら、すでに3種類の専門医を取得。今後も新たな専門医を取得予定です。第1子出産後、仕事に復帰する時は、一人で育児も家事もしないといけないと思い、とてもキツかったそうです。双子を出産後、ファミリーサポートを利用されるようになり、とても楽になったと話されました。

子育てや家事のアウトソーシングは、ハードルが高いイメージですが、使ってみると意外と使いやすく、仕事と家庭がうまく回るようです。

後藤 理英子 先生（熊本大学医学部附属病院 地域医療支援センター）

「思った通りに行かないことも多々あるけど、でも、いろいろ楽しいよ！」後藤先生のメッセージを一言で言い表すと、こんな感じでしょうか？

後藤先生は、副腎皮質から分泌されるアルドステロンの研究者として海外の賞を2度受賞され、家庭では2児の母。子育てのアウトソーシングやAIを使って、お子さんとのコミュニケーションを計られています。

「なんでも楽しみに変えちゃおう！」と、毎年医局内のハロウィーンパーティを主催する後藤先生。

嫌なことを言われたり、思い通りにいかない時の対処法としては、「このヒトは、～という価値観で動いている」と考えるようにすると、怒ったり落ち込んでいる時間がもったいなくて立ち直れます、若い世代にはレジリエンス（逆境力）を身につけてほしいと伝えられました。

今の後藤先生があるのは、「逆境と鈍感力と人脈」のおかげだそうです。